

科学者委員会 学術体制分科会
論文査読の意義及び課題に関する検討小委員会 第6回 議事要旨

開催日時：2023年5月19日（金）18:00-20:00

開催場所：オンライン会議

出席者：佐々木 裕之、小林 傳司、松井 三枝、和田 肇、山本 晴子、中村 征樹、田中 智之、堀 利栄（敬称略）

欠席者：大場 みち子、小長谷 有紀（敬称略）

参考人：Chris Graf（Springer Nature Group）

1) 前回議事要旨の確認と確定

2) 有識者からの話題提供及び意見交換

資料2に基づき、参考人からの説明を受けた。意見交換の概要は次のとおり。

- ・ Registered reports はとても良いシステムだが、合う分野と合わない分野があるのでは。
→精神医学と神経科学で生まれて小規模な実験を繰り返して一般化するような研究を対象としているので、これらの分野には一番適していると思うが、物理学のようなビッグサイエンスの分野にはあまり適していない。
- ・ STM Integrity Hub は偽の論文や偽の査読報告書を検出するのに使うのか。
→Integrity Hub は1年前からで、出版社間で情報を共有できるようにする法的枠組みを作るとともに、情報をデジタルで大規模に共有する技術も構築し、2つのツールが生まれた。1つ目は MVP（minimum viable product）と呼ばれるツールで、Paper mills の可能性を示すコンテンツのパターンを調べるもの。2つ目は重複投稿を識別するツールで、30の出版社で重複を特定して出版を中止させることができ、Paper mills が非常に難しくなる。査読報告書に特化したものではないが重要と考えている。
- ・ Registered reports の仕組みは品質管理のために十分に機能しているのか。
→これは仮説駆動型の実験研究に特化している。目的は研究課題の質、研究計画や分析計画の質をチェックすること。査読者は結果のないパッケージをレビューし、実験計画を改善できる時点で研究者にフィードバックを提供する。実験終了後に論文が提出されると、ジャーナルは2回目の査読をし、それを出版する。論文が最初の査読に沿った適切なものかを判定し、不適切であれば出版しない。
- ・ 研究計画と結果の関係はどうなるのか。
→結果が出た後に仮説や計画を再構築するという問題が発生し、その解決策として

Registered reports model が生まれた。完全な解決策ではないが、科学をより良くするための改善であり、革新のために試している。

- ・ 査読者の教育に対して、Nature は料金を請求するのか、しないのか。

→Nature は多くのリソースを無料で公開しているが、ハイエンドなものは有料。出版社はよい研究者、よい査読者になるように支援する必要があるが、研究者の雇用主も同様である。(SN 副社長の補足) Nature は査読者が査読するために必要な指示やサポートを無料で提供している。それらは特定の分野やジャーナルの特定の範囲に的を絞ったもの。査読は非常に専門的で熟練した仕事で、査読者に報酬を支払うことは継続的な課題。

- ・ 最近の科学者は非常に多忙で査読者不足であり、これが査読不正の一因かもしれない。レビューコモンズやプレプリントサーバー等のシステムについてどう思うか。あるいは、e-life の仕組みは査読者の負担軽減を狙っていると思うが、それについてどう考えるか。

→個人的にプレプリントの大ファン。プレプリントコモンズ、ピアコミュニティ、e-life がやっているプレプリントを使った査読の実験を注視しており我々はサポートする。

- ・ 福井大学の査読不正事件について、福井大学の調査委員会は不正な審査操作を確認したが、研究そのものは健全だと述べている。もし、著者がこの論文をあなたのジャーナルに再投稿した場合、どのような対応をするか。

→その論文が届いたら、論文そのものを客観的に査読すべき。査読が正しく行われることを前提に再考され、査読され、再出版されるべき。不祥事を見つけるのは出版社の役割ではなく、大学の仕事。

- ・ 査読不正と研究不正 (FFP) の違いについてどう思うか。それに対して、大学はどう対応するのか。

→一般的な出版社では、査読が適切に行われていない場合、論文を撤回することになる。その研究者が信頼に足ると判断した場合は、著者に査読を受ける機会を提供する。研究機関や大学が査読不正をどう考えるか、また、FFP とは別物と考えるかどうかは、よくわからない。大学側が調査して適切に対応すべきだし、その義務がある。

3) 審議依頼への回答案の骨子等について

佐々木委員長より資料3の説明があり、査読のトレーニングの責任母体や研究者と査読者のコラボレイティブな関係の必要性、査読の意義等の意見交換の結果、承認された。

4) アンケート調査の中間報告 (現状 500 件くらいの回答、5/23 〆切)

中村先生より資料4に基づく概要の説明を受けた。次のような意見が出た。

・査読を受けた方も編集者も査読の質が低いと感じているのはまともに査読の教育が行われてこなかったことの表れではないか。

5) その他

・回答案は6月中、アンケート詳細報告、たたき台の意見交換で7月に2回の会合が必要。

資料：資料1 第5回議事要旨案

資料2 「Peer Review Misconduct」 (Springer Nature Group Chris Graf氏)

資料3 審議依頼への回答の骨子 (案)

資料4 査読制度に関するアンケート調査中間結果集計